

# 学科試験で100点を超える方法 2021年

## 1. 誰でも「学科試験100点超え」ができる方法

学科試験は、**5科目**の全てで過去問20年を学習すると誰でも**100点**を超えることができる(過去問データは嘘をつかない)。研究会は、学科試験を短期間の学習で合格するには、限られた時間を5科目平均に活用するのではなく、法規の点数を集中的に上げた方がよいとの結論に至り、「**法規特化型講座**」を推奨している。これは、法規の過去問20年(H7~H26)を分析した結果、融合問題の項目を除くと**93.6%**の法文が繰り返し出題されていることから、過去問だけの学習で**法規25点**が取れるとした。また、効率良く学習するために、どの法文が何%出題されたかなどが分かる項目別の「**出題法文一覧表**」と「**出題問題一覧表**」をまとめた。この提案は、法規が25点なら、他の4科目は比較的低い点数(正解率68%)で合格基準90点を達成するというものである(5科目平均で90点をめざすと正解率72%が必要)。ただし、新試験制度となったH21は97点であり、その後(H22~H29)は、合格基準90点±4点以内となっているので、90点で合格とらない年度もある。なお、本提案を掲載してから多くの会員から法規を25点~26点取れたとのメールを頂いた。他方、法規に特化しすぎて他の科目の点数が下がった等の意見もあった。2021年は、この法規特化から5科目100点超えへ移行する主旨も含め、5科目の音声解説を開始することとした。

学科試験125点満点中、**100点**を超えると必ず合格できる。研究会は、様々な検討の結果、**5科目**全てで過去問20年を学習すると、誰でも100点を超えることができると判断している。法規は、上述したように過去問20年で見ると、9割以上の確率で繰り返し同じ法文が出題されている。その他の4科目は、そこまで高い確率ではないが、重要な内容は繰り返し出題される傾向にある。当然、初出題の選択肢問題もあるが、出題形式が4択という特性から**消去法**が有効であり、過去問だけの学習で容易に100点超えができると考えている(ただし、過去問は傾向分析できる20年の学習が必要)。

1級建築士は、建築士としての**幅広い知識**が必要である。従って、試験は偏った問題とならないように5科目があり、その5科目の中で幅広い項目から出題されている。下記に、計画(H8~H27)の分類表を示すが、毎年ほぼ同じ項目から同じような問題数が出題されている(公開資料は最新20年である)。その問題は、大部分が過去に出た問題の言い回しを変えたり、内容がより詳細部分の問題として出題されている(設備、法規、構造、施工も同じ)。**過去問学習が王道**と言われている由縁である。

この過去問を如何に効率よく学習できるようにするかが重要であり、研究会は項目別に全ての選択肢問題を一覧表に取りまとめた(5科目全ての出題問題一覧表)。A3件1枚には、10年間の問題が見れるようになっていて、過去問20年で1項目1問題が出ているものは、A3件2枚で全ての過去問が見れる。この**見える**という状況が非常に重要である。机の上にA3件2枚を置くことで、過去問20年の全ての問題が見えており、後述する「**目で見える学習法**」が可能となり、学習効率は数倍に跳ね上がる。一覧表は、類似問題を同じ色分けしているため、同じ色の問題を見比べると、出題変化パターンや出題傾向なども分かるようになっていて、

建築業界は、非常に忙しく、1級建築士試験に何年も合格できない最大の理由は、「**時間が無い**」の一言に尽きる。「**もし**」半年間、仕事をしないで1級建築士の勉強だけができるならば、誰でも合格できる(半年間を全て過去問20年の学習ができれば確実に100点超えが可能)。しかし、「**もし**」は無いので、研究会は、如何に短時間に効率よく学べるかを追求することとした。学科試験は、結局「**125問の各項目ごとに1点づつを確実に取る**こと」であり、そこに美味しい秘策などは存在しない(学習法には秘策がある)。各資料は、**PDF化**しているので打出し可能であり、更に**スマホやパソコン**から、何時でも何処でも学習できる。是非、本講座を活用頂き、学科を突破して頂きたい。

表1 I計画の項目別一覧表(平成8年~平成27年)

NO	項目分類	年度	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	出題数 (個)	出題確率 (%)
			(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)	(問目)		
1	設計手法																1	1	1	1	1	1	1	7	2.5
2	日本建築史作品	25															3	2	3		3	2	2	16	5.7
3	西洋建築史作品																			3	2	3	2	12	4.3
4	周辺環境																4	5,16	5		5	4	4,5	10	3.5
5	各種寸法	14,15	14	14	15	15	15	15		14,15	14,15	14,15	14,15	14,15	13,14	5,6,7	6,7	4,6,7	4,6,7	4,6,7	5,6,7,8	6,7,8	39	13.8	
6	バリアフリー	17	16	16	16	16	16	16	17	16	16	16	13	16	15	8	8	8	8	8	9	9	20	7.1	
7	都市計画作品	24			24	24			24							2	10	9	5	9	3	10	10	3.5	
8	都市計画論		24	24			10,24					24				9,10	9	10	9,10	10,11	10,11	11	16	5.7	
9	住宅・集合住宅施設	10	10	9,10	9,10	9		10	9	9,10	10	9,10	10	9	9	11,12	11	12		12	13	13	23	8.2	
10	住宅・集合住宅作品	9			10	9	9	10		9		9,24	10	8		12	11	2,11,12		12	12	17	17	6.0	
11	事務所・商業施設	12	11	11	11	11	11	12,13	11	11	11	11	11	11	10	14							21	7.4	
12	公共施設	11	12	12,13	12	12,13	12,13	11	13,16	13	12	12		12	11,12	14	14,15	14	14,16		15	15	25	8.9	
13	病院・高齢者施設		13		13					12		13				15		15	15	15	16	16	10	3.5	
14	その他作品	13			25				12				12	13		17		16		14		17	8	2.8	
15	野間各論総合	8,16	15,17	17	14,17	14,17	14,17	14,17	14	17	13		16,17	17	16	16	4,17	17	17	16,17	17		26	9.2	
16	施工管理															18	18	18	18	18	18	18	7	2.5	
17	建築概算															19	19	19	19	19	19	19	7	2.5	
18	マネジメント															25	20	20	20	20	20	20	8	2.8	
	合計問題数		12	11	10	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	20	20	20	20	20	20	282	100	

注1) 項目分類は同類問題の名称を示す。H(平成)は出題年度を示す。表内数値(1~20)は問題番号を示す。

出題問題一覧表(A3件)は会員講座のみの公開

1項目ごとに分けて選択肢を一覧表化(A3件)

このバリアフリーは20問あり=A3件2枚

類似問題を色分け

過去問10問あり

## 2. 他社書籍との相違点

### (1) 一般書籍

一般に市販されている書籍は、大きく分けると次の3パターンに分類できる。それぞれの概要と課題は以下の通り。

#### ① 過去問の解説書

概要: 概ね7年程度の過去問について、年度別に出題された問題を順番に解説している。

課題: 過去問7年では、出題傾向が十分に把握し難い(過去問だけの学習で100点を超えるためには傾向が分かる過去問20年は必要)。

#### ② 項目別に分類した解説書

概要: 5科目に分けて、各項目ごとのポイントや数パターンの問題例を示して解説をしている。

課題: 一つの項目に対する情報量があまりに少なく、この書籍だけで高得点を取るのには難しい。

#### ③ 試験関連の建築専門書

概要: 1級建築士試験に関連性を持たせて基本的な事項を解説している建築専門書(分かり易い構造力学等)である。

課題: 基本情報が多すぎて、学習に膨大な時間を要すると共に、その解説が試験問題の何点に繋がるか見えずらい。

### (2) 研究会資料

研究会の資料は、以下の特徴がある。全ての資料は、各項目ごとに1点ずつを「如何に効率良く取るか」を目的に作成している。

なお、本HPは、2015年から公開したものであり、資料は作成中のものが多々ある。今後の予定を下表に示す。

#### ① 過去問と項目別とを融合させた一覧表 ……過去問は会員講座のみでの公開

概要: 過去問20年を項目別に分類し、全ての問題を一覧表に取りまとめた(1項目がA3伴2枚程度でまとまっている)。

課題: A3伴1枚が10問題となっているので、比較検討し易いが解説文が少ない(このフォローに用語解説などがある)。

#### ② 用語解説

概要: 各項目ごとに分けて、その項目内での重要ポイントとなる用語を図や絵などで詳細に解説する。

課題: 現在未完成、適宜掲載中

#### ③ 項目別解説

概要: 5科目の各項目別に2回以上出題のある問題で重要な内容を簡単に取りまとめている。

課題: 2018年から掲載を開始し、現段階では簡単な解説に止まっている。

#### ④ 年度別の過去問解説

概要: 新試験制度となったH21以降の過去問をそのまま掲載し、その解答について解説する。

課題: 出題問題一覧表を年度別に取りまとめたものである。

#### ⑤ 音声解説(2021年から公開予定)

2021年からポイント解説一覧表と項目別重要事項について音声解説を公開する予定である。

#### ※「合格」することを第一に

「建築」は奥が深く、様々な知識を学ぼうとすると泥沼に入りかねない。

試験は、問題を解答できなければ意味がない。まずは合格すること、自己の学習環境を考慮して最も効率良い学習法を選択し、合格基準点の90点(確実な合格は100点超え)を取ることに専念する。実行委員は、全員が建築業界に30年近く実務をしてきた(全員が1級建築士)。「建築」の知識は、30年たっても未だに発展途上であり、人生の全てを掛けても終わらないものである。試験は、過去問を分析して「正解すること」に集中したい(建築知識の習得は合格後にじっくりと…)。

#### ※なぜ毎年「合格できない」のか?

毎年、かなり学習しているのに、なぜ合格できないのか。

その理由の一つに、出題内容がより細分化された部分から出題されている点にある。出題問題は、類似傾向の問題であっても、その類似内容が、より細分化された部分から出題されている。これを把握するには、類似問題がどの程度まで詳細部分として出題されているかを理解する必要がある。その点については、過去問20年が一覧表で見れて、その傾向が一目瞭然の「出題問題一覧表」を「目で見える学習法」として学習することで解決できる。

#### ※近年は「戦略的な点数取り」を目指すべき

ひたすら学習するのではなく、I計画などの項目を確実に取るかなど「戦略を持って」合格点を目指すべきである。

H29は、多くの方が学科I計画で足切にあっている。その理由として、**建築作品**が6問も出題されたことによる。多くの時間を費やしても点数が取れ難い作品問題が、20問中6問も出題されると、足切10点にかかりやすくなる。しかし、ここは、学習の仕方について、もっと深く考えるべきである。「5科目での過去問20年の項目別一覧表」を見ると、過去20年間に作品がどの程度出題されているかが理解できる。その作品問題の学習も必要であるが、逆に、それ以外の項目は、必ず取って11点にたどり着くという戦略的な学習法も必須と言える。更に総合点としては、I計画を足切回避科目として割り切り、その他のⅢ法規、Ⅳ構造、Ⅴ施工で点数稼ぎをして90点を目指すなどの全体的な戦略での点数取りも必要である。

#### ※「資格学校」へ通学すると合格できるのか?

学校へ通学すると「合格」できるなら、話は簡単である。

一般に、早い方で2年、通常3~5年とはかかると言われている(1級建築士取得まで約200万円かかるという所以である)。それでも資格学校の講座や資料は、充実したものである。通学は、週1の講座であるが、それだけでは合格できない。結局は、毎日、どれだけ学習したかによる大きい。資格学校の公表している「合格占有率」は、「合格率」ではない(合格者全体に占めるその学校の学生の割合である)。決して公表してくれないが、「通学者が何名で、その内、何名が学科合格したか」その数値(合格率)は、それほど高くない。更に、通学者全員へ共通の学習法が取られているので、通学時の学習で合格が確定できるとは言い難い(受講者への平等性から差別化学習ができない)。それでも、現状は、通学した方が、合格への近道であることに変わりはない。

⇒研究会は、通学しないでHPだけの過去問20年の学習等で合格できることを目指している。

#### ※合格率は低いですが、世の中にはもっと…

1級建築士の合格率は低い、ストレート合格は、学科20%製図40%の合格率でストレート合格率は $0.2 \times 0.4 = 8\%$ となる。

学科試験では、毎年、約2.5万人が受験して約5千人が合格している。その合格率は、15~20%と厳しいが、それでも約5千人は合格している。

最近、コンピューターで話題となっている「囲碁」のプロ試験は、日本棋院において1年間に3人しか合格できない超難関試験である。小学生で囲碁の神童と言われ、全国大会優勝などした方が、プロを目指して日本棋院の「院生」となる。毎日10時間以上囲碁の勉強をしても、プロ試験(3人)に入れず、

### 3. 100点を超えるためのベストな学習法

ここでは、100点を超えるベストな学習法を紹介する。この100点を超える学習法では、5科目の過去問20年を対象とすることから、概ね半年の学習時間が必要である。更に、学習効率を向上させるため、2021年からは音声解説を公開する予定である。

#### (1) 講座の概要

過去問20年を学習すると確実に100点超えが可能である。

5科目の過去問20年の選択肢問題は、(13年×100問×5選択肢+7年×125問×4選択肢)=10,000選択肢問題となる。

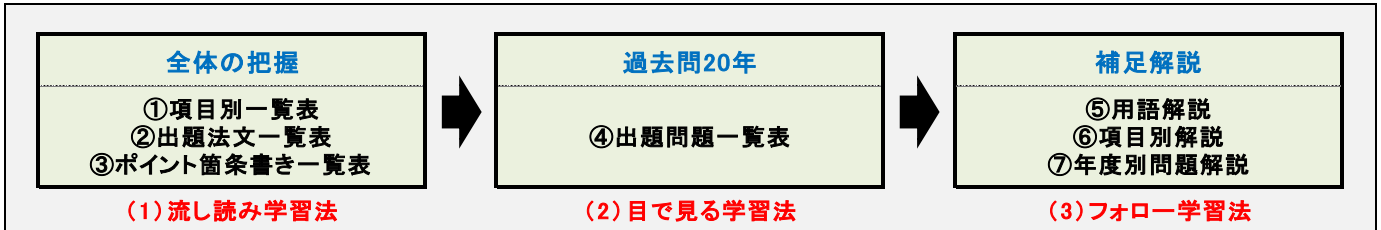
これを全て学習するのは、あまりに膨大な量なので「無理」と思われるが、ここで学習法の「秘策」の出番となる。

単純に、過去20年分の問題と解答を「一般書籍」で購入し(購入も難しいが)、年度ごとに20年分を学習するのは、効率良く理解できるとは言い難い。研究会は、項目別でA3件1枚に10問をまとめた「出題問題一覧表」による学習法を提案している(これは5科目共通事項)。毎年1問の出題がある項目であれば、過去問20年はA3件2枚に全てまとまっている。これを机に置くことで、過去20年分の1項目の全ての選択肢問題が見れるようになる(1項目2問出題の場合はA3件4枚になる)。この過去問20年の1項目全てが一目で見れる状況にあることが非常に重要である。

この表では、出題確率の高い類似問題を色分けしている。最初は、一通り時間を掛けて全問題を見比べないといいない。その時に、各自が追加でマーカー等して、より分かり易いように書き込みをすると良い。2回目からは、20年全ての問題が一目で見えていることから、類似問題や問題変化パターンなどが目で見て分かるようになる。研究会は、これを「目で見て把握する学習法」と位置付けている。この問題傾向を目で見て把握する方法は、単純に過去問を年度ごとに繰り返し解く学習法に比べると、何倍も効率が高まる(これが学習法の秘策)。更に、この目で見る学習法は、毎年細分化される問題傾向を理解しやすい。つまり、毎年、一生懸命学習しているのに、点数が上がらないと悩んでいる方に対して、その解決策ともなりうる。

この出題問題一覧表以外にも下記のような資料を用意している。

- ① 項目別一覧表: 5科目の問題を項目別に振分け一覧表 …どの項目が毎年何問でているかが把握できる(出題の多い項目から学習する)
- ② 出題法文一覧表: Ⅲ法規のみ項目別に選択肢問題の法文を振分け一覧表 …どの法文が過去問20年で何回出題されたか分かる(出題確率あり)
- ③ ポイント箇条書き一覧表: 5科目の項目別にポイントを箇条書きとした一覧表 …項目の全体像を素早く把握できる(流し読み学習法)
- ④ 出題問題一覧表: 5科目で項目別に過去問20年の選択肢問題を振分け一覧表 …毎年1問出題項目ならA3件2枚に過去問20年が全てある
- ⑤ 用語解説: 5科目で項目別に用語などを図や絵を多く取り入れて解説 …④出題問題一覧表の解説不足をフォローする位置付け(適宜追加中)
- ⑥ 項目別解説: 5科目の項目別での解説 …2回以上出題のあった問題について重要事項を簡単に取りまとめている
- ⑦ 年度別問題解説: 新試験制度H21以降の問題について詳細解説
- ⑧ 音声解説: 2021年から音声解説をする予定 …ポイント一覧表の音声解説、項目別の重要事項のパワーポイント音声解説を公開する予定



#### (2) 学習法の一例

研究会の学習法が各種資格学校の対面学習法などと大きく異なる点は、あらゆる場所と時間で、自分の得意な項目、不得意な項目を何回でも繰り返し自分のペースで見ることができるとい点である。

当ホームページは、スマホ&パソコンから見ることができる。例えば、通勤電車内ではスマホで、会社内の昼休みはパソコンで、特にスマホならトイレ内や打合せ前のちょっとした時間など、何時でも何処でも資料を見ることができる。また、5科目のどの項目でもクリックするだけで見ることができる(資料はPDF化しているのでカラープリント打出しも可能)。建築業界は、設計、施工に関わらず「忙しい」ので、学習時間を自ら工夫して作り出すことも合格条件となる。

具体的な学習法として一例を挙げると、例えば「1日1項目」を学習すると決める。

5科目の項目は92項目ある。1日1項目の学習(1項目が2~3問題あるものは休日に集中学習)とするならば、約3ヶ月で1回目の学習が終わる。2回目からは上述した「目で見て把握する学習法」が使えるので、かなり効率良く短時間に学習することができる。各自の学習時間にもよるが、初めて受験する方でも、概ね半年(1回目3ヶ月+2回目2ヶ月+3回目1ヶ月…過去問20年の学習を3回実施)あれば100点超えは可能であるとみている(用語解説、項目別解説、年度別問題解説も同時に学習する)。

※各社PRの中には、近年の試験では新傾向・新技術が合格に影響するとして、「もう過去問では合格は難しい」等と書かれているものもある。確かに、毎年、法改正や新技術が組み込まれるので、影響することは事実である。しかし、その出題比率は、それほど多くない。その証明として、昨年の市販の解説書と今年の解説書を並べて、新しくなっている部分を分析すると簡単に分かる。大部分が同じ内容であり、新規傾向の内容は少ない。逆に過去問の傾向分析や過去問学習無くして合格はあり得ないことが分かる。つまり、新傾向は重要であるが、「過去問では合格は難しい」は、はっきり言って間違いである(更に、新規問題があっても4択なので消去法を使えばかなり解答できる)。

注) 研究会は、市販の書籍や各種資格学校の対面学習などを批判するものではなく、効率良く学習できる方法を提案しているものである。多くの方からの聞き取り調査の結果から、学科も製図もあまりに高額な講座が一般化していることへ一石でも投げれば幸いである。